

教職の魅力創造プロジェクトに参加して

青柳 敦子（山形県立左沢高等学校校長）

1. 教職の魅力創造プロジェクトの意義

「教師にしか見ることのできない夢がある。」

「教師しか味わうことのできない人とのつながりがある。」

教職の魅力とは何か？の問いに、山形大学の森田智幸先生がお答えになっている映像がプロモーションビデオの冒頭で流れるようです。素直に感動してしまいました。

自分のことを振り返ってみると、教師の仕事に30年以上携わる中、ただがむしゅらに授業や生徒に向き合って来て、教職の魅力が何か、立ち止まって考える機会はありませんでした。ましてや、生徒に魅力について語ることは、してこなかったように思います。教師自身もそうですが、生徒にとっても、「教職」は、あまりにも身近にあるが故に、「職業」として意識したり、捉え直したりすることが難しいのかもしれない。

「団塊の世代」と呼ばれる50代後半のベテラン教員が大量に退職する一方で、全国的にも教員を希望する人の数が年々減少しています。本県も同様で、小学校の採用試験受験者が7年前に比べて約100名減、志願倍率も今年度は1.5倍となってしまいました。深刻な状況です。

こういった危機的な状況を打破し活路を開くため、本プロジェクトが立ち上がりました。大学生が恩師にインタビューする「聞き書き」やプロモーションビデオの作成などを通して、今まで光が当たりにくかった教職の魅力を立体的に浮かびあがらせ、「未来の教育界を担う人材の育成」につなげる本プロジェクトの意義は大きいと捉えています。全国的にも画期的な取組みであり、今後の山形県教育界に新たな光を与えてくれるものと、メンバーの一人としても大いに期待しています。

2. 教職の魅力創造プロジェクトに参加しての感想

プロジェクト会議に参加して驚いたのは、① 企画がすごい、② メンバーがすごい、③ 高校生や大学生の発言がすごい、ということでした。

① 企画については、「聞き書きプロジェクト」「教員体験セミナー」「学びのフォーラム」だけでも卓越した内容ですが、アンケートによる理論構築、更にはプロモーションビデオの作成も含まれており中学生や高校生に直接訴えかける仕掛けが魅力的です。

② メンバーは、大学、県教育委員会、教員、そして大学生や高校生も入っています。当事者ともいえる大学生と高校生を構成メンバーに入れる、この発想と多様性が素晴らしいと感じています。

③ 会議に参加するたびに、高校生と大学生が積極的に発言してくれて、その発言内容に感嘆しておりました。ひと昔前であれば、大学教授の前で高校生が発言する等、想像できなかったことです。教職の魅力創造に向けて、自分なりの考えをしっかりと持ち、堂々と表現するその姿に、本県が推進している探究型学習の成果の一端を垣間見、本プロジェクトの成功を確信したところです。